

● 素謡とは

一般に謡の稽古をするという場合は、普通、素謡の稽古を指すのが常識になっております。素謡には囃子が入らないので、拍子に神経を使う必要はないし、従って節を主体にして、上手な人は勿論のこと、下手は下手なりに楽しめるといふ長所があります。

どの職場でも、各学校でも、素謡の同好会があります。

いわば、能の入り口ではありますが、又、臭も深いものです。一生の友とすることも出来ます。

『老いずして古事を知る、友なくして閑居を慰む、触れずして仏道を知る、恋せずして美人を想う』等々、謡曲十五徳などというものも出来ております。

祝宴で目出度い一節を謡うゆかしい風習も、いたるところに残っております。

素謡を謡って楽しむ習慣は、すでに室町時代からありましたが、江戸時代になって木版印刷の技術が進歩し謡本が普及すると、その習慣は広く深く庶民の間に浸透し素謡が流行しました。しかし、素謡の稽古も次第に進んできますと、能や舞囃子の地謡が、どうしても自分が覚えてきた素謡と、どこか少し違っていることに気付きます。

素謡では、拍子にこだわるべきではないという主張があります。

特に、大ノリは乗らずに謡う人が多いようです。

しかし、あまり拍子を重視しない人でも、平ノリでは所謂三ツ地謡を準用して、いくらか拍子に合わせるような気で謡い、全く拍子を見捨てているわけではないのです。

このように、素謡では拍子を見捨てているわけではありませんが、いろいろもったらしい理由をつけて、拍子を軽視する立場をとっている人が多いと思います。

拍子を会得することは、一般の人々にとってはかなり困難でありますので、拍子にあまりこだわらない方法をもって、謡の人口を増加させる狙いがあるのかもしれない。

しかし、素謡を音楽としてみるならば、大ノリや中ノリくらいは完全に拍子に合わせて、序破急を知らねばならないと思います。

(追記)

大小鼓、太鼓、笛については、拍子その他を理解するために、どれか一つ、玄人の先生に師事することもよいと思います。

但し、あくまでも素謡の上達を願うものであります。

その楽器の音の出し方にめいったりして、素謡を忘れては困ります。

● 謡曲とは

謡曲とは、「能」の歌詞を謡う声楽にして、拍子楽器により時間的支配を受くことあるも、音階的には何ら支配されることなき独立的声楽なり と言われております。

従前は、よく『ろくに謡曲も謡えぬ中に、囃子などやると謡が崩れて仕方がない。拍子はやらぬ方がよい。数を重ねる中に、段々真の謡が出来るようになれば拍子も合うようになる。』

と言われたもので、従って、何時か合うだろうというので、拍子も何も無しに、所謂、坊主謡、百姓謡という目茶苦茶な稽古をして平気でいたものです。

玄人といえども、放っておいて拍子に合うなどという事は、決して出来るものではありません。況んや素人においておやです。拍子を知らずに稽古していて、それが自然に合う様になるなどということは、百年河清を待つより難しいと思います。

例えば、長唄、清元でも、三味線なしでは稽古しません。三味線のあるところ、必ず間があります。間の良い悪いはある程度天性としても、拍子なしでやれるものではありません。

皆さん、拍子を重視して頂きたいと思います。

謡曲の曲は音楽を意味するものと思います。音楽なればこそ拍子があるのです。

謡らしきものは謡えても、遂に謡は謡えなくなります。（拍子楽器による時間的支配）

大ノリ、中ノリ、平ノリ、序破急は必須となります。

そして地拍子についても、自分で書けなくても運用はよく知るべきです。

● 地拍子とは

ところで、地拍子とは一体何でしょうか。

地謡に入る拍子だから地拍子と称する、と言ってる人がありますが、それはとんでもないことです。地拍子とは、地のところだけでなく、シテの謡にも拍子は存在します。

一種のノリをもっております。

だから、地拍子の地とは、決して地謡の地と同種のものと速断するのは絶対にいけません。

天地の地に匹敵する大きなものであります。

さて、拍子とは、謡にかぎらず大抵の歌にはこれがあります。

つまり、乗ってうたうものには、その気分を揃えるために必ず拍子をとっていきます。

軍隊の一、二、一、二、の行進が、一つの拍子なのです。

君が代でも、それらは文字を時間的に運んで拍子を取ってうたいますが、その一句一句は何れも八つの拍子を含んで、これを繰り返しています。

すなわち、謡の地拍子は、八個の拍子と特定の字句に配当して、これを繰り返していくことであります。

ところが、文明の高度に応じて、この調子にノリやテンポ、間があるようになってきたのです。

又、求められてきたのです。

大体において、節の混雑したところでノリが増すと心得て、節が滞らぬところはノリも滞らずにスラスラ運ぶものと心得て大過ありません。

又、役でいえば、シテはワキよりも多くノリ、ワキはツレよりも、女は男よりも、老人は若人よりも、亡霊は現代人よりも、殿上人は武人よりも多くノルというようなところもあります。更に拍子にかかっているところで、ノラヌ謡い方をする場合に、極端になるとノリを外すことがありがちであり、これが拍子を心得ぬ人のよく陥る弊です。

それと相對して、地拍子の寸法は心得たが、運びの出来ない人は、拍子にかかるところはノリすぎてベタベタするものです。

そのような人は、拍子のいいところでも多くノリをつけ過ぎる傾向を有しています。

この両者の弊を脱して、『運ぶ』謡い方をするようになれば、それだけでも立派な謡手と呼ぶことが出来ると思います。

地拍子（八つ拍子）を完知し、大ノリ、中ノリ、平ノリ、序破急、位が必須となります。

● 囃子とは、囃子事とは、囃子謡とは

囃子は、謡を伴奏するものですから、その謡の気分を巧みに盛り上げるものでなければいけません。

しかし、幽玄な情緒の時には、囃子が邪魔になっては困ります。

修羅物のときには、勇壮な戦を再現するために、テンポの速いはげしいムードを作りださねばなりません。

天女の舞の時には、太鼓が入って舞台は華々しく浮き立ってきます。

この様に囃子は、その曲によっていろいろな雰囲気を作り上げる役目をもっています。

そして特殊の「掛け声」をもっています。

打つ事でリズムを作る事は同じなのですが、掛け声だけでリズムを作ったり、ムードを盛り上げたりする独特の演奏方式をもっているということです。

囃子方は、能の中で謡われる謡の伴奏だけをするとは限りません。

舞台では謡は全然謡われていないのに、囃子方はそれぞれ専門の楽器を演奏している場合が非常に多いのです。

この場合の囃子を、特に囃子事と呼びます。

さて、謡本を見ますと、登場する役者の右肩に[]をつけて書いてある用語があります。

（例、高砂後シテ[出端]となっております）

名ノリ笛、アシライ（会釈）出し、次第、真ノ次第、一声、真ノ一声、真ノ来序、複式能の後シテの登場楽には、この他に出端（デハ）、早笛、大ベシ、下り端等があります。

従って、単調な雨だれ拍子のくり返しでは、舞台の気分を醸し出すのは不可能でも、囃子方の各派は、その独特の手附をそれぞれ持っているのです。

演者や地謡の謡に、そしてお互いの間を、丁々発止の真剣勝負を繰り広げながら、能を進行してゆきます。

道成寺の小鼓、清経の「恋の音取」の笛などは、シテに一騎討ちを挑むもので、舞台上の死闘が見所をよるこぼせる所以でもあります。

理論が先に出来て、次に技術が出来たのではなく、技術が先にできて、後から理論化したものです。理屈よりも実践ということが能楽の常識となっておりますのうなずけます。

囃子謡は、素謡と地拍子謡を適当に織り交ぜて謡う謡になります。

これは完知せねばなりません。

勿論、位が重要になることは明白です。

● まとめ

ところで、謡曲とは、音階的には何ら支配されることなき独立的な声楽なりと前述しました。音楽とは、楽器や肉声で音を美的に調和結合させて、感情や情緒を表わす芸術とされておりますが、謡は肉声の音楽とはいえ、楽器は全然入りませんし、勿論、音譜もありません。

音の高低を五線譜に書き現わす発想は、欧米の諸国民の間から出たものであらうと思いますが、日本人的発想の高低は、甲（カン）と乙、黄鐘、盤渉などの言葉で書いてありますが、高音と低音の結びつきが、五線譜で表現出来るほど判然としていないと思います。

この原因は、欧米人と日本人の国民性にあると思われれます。

欧米人は理論的であり、日本人は感覚的であります。

「能」は、一般大衆も参加してその喜びをかみしめる事が出来る、自然に根ざした芸術です。音痴は駄目、声の悪い人はお断りというような排他的なものではありません。

そのためには、観念的な音符で表現することは難しすぎたのではないのでしょうか。

たしかに、上音は一つの目安であり、そのあとに来る音の上げ下げには一定の法則があります。しかし、上音はどういう音かと決める事は、不可能というよりは、むしろ各自の自由にまかせられているとおもいます。

ここにも、日本人の幅広い豊かな感覚が伺われます。

それから又、ツヨ吟（剛吟）なる独特のものが派生し分立してきました。
創作時代は全てヨワ吟（柔吟）でしたが、江戸時代に入ってから二つの吟が出来たのです。
一般の音楽では、崇高、明朗、勇壮、豪快、悲壮等々の男性的な感情をどの様に表現している
のでしょうか。

大部分は、楽器に任せていると思います。

これを、肉声で表現しているものがツヨ吟なのです。

地の底から湧き出づる圧迫感を、楽器以外で表現出来る音楽は、謡以外にはありません。

ツヨ吟こそは、音楽界に誇り得る一つの大きな魅力であると思います。

音階的には支配される事のない立派な声楽なのです。 （音階的無支配）

しかし何と云っても、謡は変幻自在、それ自身を楽しむものです。

「能」の様に囃子が入らないから、そのリズムを謡だけによって表現させねばならず、一字一
句、非常な苦心があることもよくわかります。

だが、地拍子の理解があれば素謡も自然に生きてきますし、謡自身が大変違った重みをもつよ
うになります。

地拍子の原則等は是非習得しておきたいものです。

さて、この華麗なる声楽が、足利時代から六百年この方いかに強い影響を国民に与えてきた
かを、この道に遊ばんとする人は先ず第一歩でふり返る必要があると思います。

武士道の真髄、芸術の花、ことごとくこの道に集っていると云える謡を、他の娯楽と同一に考
えてはいけないと思います。

充分なる抱負と信念とを持って、次の世代に対処してゆきたいと思います。

